



## 拝領鞍の意味

江戸時代の大名家は、將軍家をはじめ他の大名家との間に、多くの贈答儀礼を行ってきました。なかでも將軍家との贈答は、徳川家と諸大名との間の主従関係を確認するという非常に重要な意味をもっていました。

左の写真の鞍は、安政5年（1858）12月26日、14代將軍徳川家茂から、当時

金梨地蕪時絵螺鈿鞍（彦根城博物館蔵）



大老職を勤めていた井伊直弼が拝領したものです。居木裏の銘から、享保4年（1719）、幕府の御用鞍打師であった辻長政の作であることがわかります。

その装飾はさまざまな材質・技法を組み合わせ、蕪の文様を実に大胆な構図であらわしたものです。金梨地に大きく広がる葉の部分は金の高時絵と螺鈿によって表現され、複雑にのびる根の部分は銀板を打ち出しています。

鞍と蕪の組み合わせなど奇異に思われるかもしれませんが、蕪はその読みが頭・冠に通じることから、人の頭となるようにと願いをこめた縁起の良い文様として好まれてきました。

この鞍については、直弼自筆の書付をはじめいくつもの関連史料が残っており、鞍を拝領した際の状況を知ることができます。

それによると、この鞍は8代將軍徳川吉宗が常用し、その後の將軍も代々用いたという由緒ある品で、12代將軍徳川家慶が所用したという延寿国寶作の小刀とともに、江戸城の御座の間において、

家茂自身の手から直接手渡されたということですが、また、老中・若年寄らもそれぞれ拝領品を賜っています。

この背景として考えられるのが、これより約一月前の12月1日に行われた家茂の將軍宣下です。こうした品々は、家茂の將軍擁立をはじめ、いわゆる「安政の大獄」を行うなど当時の複雑な政治を担っていた幕閣全体に対する恩賞の意味があったとみられます。

直弼に対する拝領品に、こうした鞍に加えて「延寿」という名字や「国に資する」と読める名前から縁起のよい品として好まれていた延寿国寶の刀が選ばれ、しかも將軍より手づから渡されたのは、格別の厚意といつてよいでしょう。これを知った直弼の家臣、長野主膳や宇津木六之丞は、「これまでの忠義が認められ感涙した」という旨を手紙に記しています。

また、この後、直弼が鞍の形態や文様各部の材質・技法まで詳細に記録した絵図を作らせ、みずから註を書き記していることから（右下の写真）、この拝領が直弼にとって記念すべき出来事であったことがつかがわれます。

（彦根城博物館字書員 丹羽貴之）



金梨地蕪時絵螺鈿鞍図（彦根城博物館蔵）

写真の鞍および絵図は、現在開催中の彦根城博物館テーマ展「井伊家伝来の馬具―拝領の鞍―」で12月22日(日)まで展示中です。